【基幹共同研究報告】

コンタクト・ゾーンとしての現代ファッション

国際ファッション専門職大学
田中雅一

本研究は、現代ファッションをさまざまな接触領域（コンタクト・ゾーン）と捉えることで、これまで見過ごされてきたファッションの可能性について総合的な観点から考察することを目的とするものである。研究構成は、学内共同研究員として田中雅一（代表）、金谷美和、小山有子、丹羽朋子の４名、学外の研究協力者として高馬京子（明治大学准教授）、宮脇千絵（南山大学准教授）、蘆田裕史（京都精華大学准教授）の３名からなる。

初年度である2019年度は、現代ファッションの接触領域を広く渉猟するために、研究会メンバーを中心にして研究会を重ね、その成果を現代ファッション特別セミナーとして公開し、学内で共有することにつとめた。６回の共同研究会議、５回の現代ファッション特別セミナー、３回の現地調査を行うことができた。

【現代ファッション特別セミナー】

第１回　高馬京子氏「ファッションメディアにおけるファッションと規範的女性像の構築・伝達の変遷」（2019年10月16日、東京）

第２回　山崎明子氏（ゲスト・スピーカー、奈良女子大学准教授）「近現代日本の「手芸」とそのジェンダー構造」（2019年11月16日、東京）

第３回　蘆田裕史氏「ファッションの研究・批評・教育――研究者がファッションスクールでなにを教えるべきか」（2019年12月18日、大阪）

第４回　小山有子「宮中服　批判考――日本人と着物、「伝統」と「改良」をめぐって」（2020年１月15日、東京）

第５回　宮脇千絵「中国における「民族衣装」とは何か――雲南省文山のモン/ミャオ族の「新しいスタイル」を事例に」（2020年２月19日、名古屋）

【現地調査】

第１回　文化服装博物館　（2019年10月19日）

第２回　いとへん universe（京都、西陣）、京都服飾文化研究財団（KCI）、神戸ファッション美術館　（2019年12月17日～18日）

第３回　トヨタ産業技術記念館　（2020年２月19日）

本年度明らかになった接触領域としては、ファッションメディア、民族衣装、着物、ファッション教育、展示、手芸がある。たとえば中国の少数民族は、外来の素材や技術を取り込んだ既製服化された「民族衣装」を民族のアイデンティティとして着用するだけでなく、他国に輸出している。「民族衣装」はまさにローカルとグローバルの接触領域となっているのである。このような成果は、学内の教員に広く共有された。共同研究者、研究協力者との協力体制も整っており、来年度もさらに研究を推し進めていく予定である。

【共同研究報告】

静岡県天龍社繊維産地における別珍・コール天生地製造関連企業の研究

国際ファッション専門職大学
篠原航平

静岡県の旧福田町（現磐田市）・掛川市・袋井市・周智郡を中心に形成される天龍社繊維産地は、別珍・コール天生地の国内生産シェアの95%以上を占める[1)]。そこで生産される高品質な別珍・コール天生地は国内外の高級アパレルブランドから高い支持を得る。コール天は明治期に輸入品が鼻緒の素材として人気を博していた中、1896年頃同産地で製品化され域内に急速に広まった[2)]。別珍は、その約10年後、1910年に製造に成功した[2)]。その後別珍・コール天産業は成長を続けるが、生産量99,164千㎡（別珍・コール天合算）を記録した1979年をピークに減少に転じ[3)]、2018年には843千㎡まで縮小した[4)]。原因は、衣料品生産の海外移転、トレンド性と季節性が高く、用途も限定される生地特性、そして昨今の国内アパレル産業の不振によると考えられる。

別珍・コール天の生産工程には、剪毛・カッティング工程、毛焼き工程という独自の製造工程がある。両工程は別珍・コール天以外の生地生産には用いられないため、国内生産を一手に担う天龍社繊維産地以外には存在しない。産業の縮小に伴い、両工程の廃業は進み、日本産の別珍・コール天生地の存続は現在危ぶまれている。

本研究ではネットワーク分析の手法を用い、天龍社繊維産地における別珍・コール天生地製造関連企業の企業間ネットワークとその将来的な姿を描きたい、と考えている。具体的には、工程別に事業者からヒアリングを行い、取引の集中と分散といった現状分析を行う。さらに各事業者の事業承継者の有無による同産地の将来の姿も予測したい。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、同産地は不透明な状況が続いているが、本研究が別珍・コール天産業の維持・発展の一助になると思われる。

＜注＞

1)　天龍社織物工業協同組合・天龍社綿スフ織物構造改善工業組合　「主な活動　業界の現状」
http://www.siz-sba.or.jp/tenryu/katudou.htm　2020年10月15日閲覧。

2)　胡昌紅・上野和彦　2011「別珍・コールテン織物産地の変容」『学芸地理』66: 27-38。

3)　日本綿スフ織物工業組合連合会・日本綿スフ織物工業連合会　2006『綿工連史』日本綿スフ織物工業組合連合会・日本綿スフ織物工業連合会。

4)　日本綿スフ機業同交会　「2018年(平成30年)綿スフ織物統計年表」
https://www.jcwa.jp/data_files/view/133/mode:inline　2020年10月15日閲覧。

【共同研究報告】

東海地域における養蚕業の再興に関する学際的研究

国際ファッション専門職大学
高間由美子

本研究の目的は、東海地域における養蚕業の衰退および再興の実態を把握し、養蚕業の再活性化を通じた地域活性化のための可能性を提案することである。かつて養蚕業は日本の近代化に重要な役割を担い、なかでも東海地域は中心的な産地のひとつであった。現代では養蚕業の衰退は著しく、従事する農家はわずかである。しかし近年、群馬県での絹産業遺産群の世界文化遺産登録などを背景に、伝統産業の維持や障害者雇用の拡充、地域活性化を目的に、新たに養蚕を始める人びとも現れている。

そこで、本研究では東海地域における養蚕業がどのように衰退してきたか、そのうえで現在どのような再興の動きが起きているかを調査する。さらに、こうした動向が一過的にならず継続するためには商品化と市場の確保が不可欠と考え、絹を用いた商品のデザイン、販路、広報戦略等の可能性を検討する。本研究は、高間［1993］[1] による東海地域の絹製品の生産状況の調査結果以後、30 年の間にいかなる産業構造の変化が生じたかが明らかになるという学術的意義とともに、この地域の伝統産業と地方文化の再考を通して、養蚕業および地域の活性化に必要なアイディアを還元できるという社会的意義もある。

これまで現地調査として、①豊田市近代の産業とくらし発見館での企画展『まゆまつり 2019 とよたの養蚕と信仰』、②美濃加茂市民ミュージアム文化の森での収蔵品展『蚕とまゆ展』生活体験館（まゆの家）民具展示会、③岐阜県飛騨古川町、高山市の養蚕跡、④長野県岡谷市での調査、⑤岐阜県安八郡輪之内町での養蚕農家宅における実態調査などを行ってきた。これらから、生糸を生み出す蚕は大切に扱われ、地域によってさまざまな民間信仰や風習もあることを知った。生糸の輸出が東海地域の産業をいかに支えてきたかを改めて知ることもできた。加えて、養蚕農家宅の飼育から出荷までに取り組む懸命な姿に感銘を受けた。特に作業中は蚕をいつくしむ姿が印象的で、養蚕衰退への危機感、伝統継承の重要性、採算度外視で担っている現況などの聞き取りを行うことができた。

以上の現地調査をきっかけに再興の重要性に触れることができた。これらの調査を踏まえ、東海地域においての今後の課題は、①地域産業の活性化、②産学共同のコラボレーション、③商品化の機会、④産業、伝統、文化の理解、⑤素材、技術、デザインの創造などに取り組み、商品化と市場の確保を行うことがこの地域の伝統産業の再興にも繋がる。

東海地域の養蚕業をはじめとする多分野の伝統産業を学ぶことは、国際的に活躍することを目指す本学においても重要であり、学ぶ学生にとっても貴重な体験になろう。今後も本学主導による産学連携を深めながら、さらに研究の歩みを進めていく。

＜注＞

1)　高間由美子　1993「岐阜縮緬に関する一考察」『東海女子短期大学紀要』19: 15-25。

【共同研究報告】

SDGs と大阪・関西万博、ファッションにできることは

国際ファッション専門職大学
富澤修身

本共同研究の目的と意義は以下の通りである。

国際連合が提唱する持続可能な開発目標（SDGs）の達成と 2025 年開催の大阪・関西万博の開催に向けて、ファッションを基軸に据え、ファッションの近未来的あり方、大阪・関西の近未来的可能性を明らかにすることが本研究の目的である。これにより新しいファッション、新しいファッション・ビジネスのあり方を明らかにすることが本研究の意義である。

学内メンバーは富澤修身教授、髙原昌彦准教授、藤井輝之准教授、髙山遼太講師であり、学内協力メンバーとしては菅原正博教授、畑中艶子准教授が加わった。学外協力メンバーとしては大阪商工会議所からは小林幸治流通・サービス産業部長、同産業部の柳田恵里氏、津村美沙紀氏、協同組合関西ファッション連合からは大西洋市事業推進グループ部長にもご参加頂き、大阪産学連携研究会の名の下に共同研究を推進した。

2019 年 9 月 18 日に第 1 回大阪産学連携研究会を開催し、2020 年 3 月までに、合計 9 回研究会を開催した。また、12 月 11 日に実施した本学グローバルファッション研究センター主催のシンポジウムでは、本研究会の成果を踏まえて、研究会代表の富澤が「ファッションの大変動と大阪･関西のファッション・ビジネス」と題して基調講演を行った。

また、研究会での報告をベースに各メンバーによるそれぞれの独自の調査研究の成果を取り入れて全 87 頁の報告書を作成した。報告書の構成は、第 1 章から第 5 章までの調査研究報告と 2 つの寄稿、1 つの実践的事例研究からなり、そのタイトルと執筆者は以下の通りである。

序　章　今、ファッションとファッション・ビジネスの立ち位置が問われている（富澤修身）
第 1 章　ファッションにできること（富澤修身）
第 2 章　アップデートするファッションとは？（藤井輝之）
第 3 章　新時代のファッションビジネスにおける各企業の取り組み（髙原昌彦）
第 4 章　ファッション関連企業の SDGs に向けての未来戦略（畑中艶子）
第 5 章　大阪・関西万博でのファッション施策の在り方（菅原正博）
寄稿 1　大阪・関西万博を起爆剤としたファッションビジネス変革への期待（小林幸治・柳田恵里・津村美沙紀）
寄稿 2　国際ファッション専門職大学大阪産業連携研究会について（大西洋一）
実践的事例研究　SDGs 実現を目指すファッション・ビジネスの事例報告（髙山遼太）

【共同研究報告】

サステナブル社会の構築をめざした衣服選択研究

国際ファッション専門職大学
松岡依里子

国際社会の中で持続可能性を実現するためにも、企業においても消費者においても衣服所有における豊かさの再考が喫緊の課題である。ニューノーマル社会に移行する中で、「豊かさの再考」につながる実証は、社会的ニーズが非常に高い。本研究では、「SDGs」という地球規模の課題を、個人の「ワードローブ」（特にその「消費行動」の側面）と結びつける。文化的背景を鑑みながら、「衣服を所有し選択する」ということにおける個人の意味付けを探り、実際の衣服画像と照合すること、また衣服を廃棄する際の考え方や行動まで一連の「衣服選択過程」における流れが文化的、心理的にどのような関わりを持っているのか、つまり自分のワードローブを構成する個人の取捨選択基準を探り、サステナブルでおしゃれなワードローブ教育に発展させることが必要な課題ではないのかという問いをたてた。

人間の衣服に関する一連の行動には、衣服を選択し、所有（購入、借りる、共有など）により組み合わせを行い、着用し、評価され、廃棄（あるいは譲渡、寄付）するという流れが存在する。本研究では、家政学における衣生活の中の衣服選択過程に着目し、ワードローブ調査を通して、現代の課題であるサステナブル社会の構築をめざす。分析には、多変量解析およびAIによる画像分析を行い、科学的な根拠を追求し、個人のライフスタイル、文化的背景、心理なども含んだ人間行動調査により衣服の取捨選択基準を明確にし、ガイドブックを作成する。

大学生と専門学校生及び40代以上の男女のワードローブ調査を行った。「着用していて好き」「着用しているが好きではない」「着用していないが好き」「着用せず好きでなくなった」のカテゴリー別に写真を提供してもらった。また、質問紙調査とインタビュー調査で、ライフスタイルとファッション志向性、ワードローブ整理後の感想などを記載してもらった。分析には、量的分析（多変量解析、AI分析）及び質的分析（テキストマイニング、インタビュー分析など）を行い考察した。

大学生のワードローブ整理結果から、「自分では気づいていなかったが、量のわりに着ていないアイテムが多く、もっとコーディネートを考えてから購入を検討した方がいい」など、自己の気づきと他者との比較について分析した。また、アイテム傾向とコーディネート事例についての動向分析も行った。この結果については、ファッションビジネス学会（2020年11月）にて発表した。AI分析研究の動向については、東京国際工科専門職大学教授大関和夫氏と日本感性工学会全国大会（2020年9月）にて「トレンドの要素を埋め込んだファッションレコメンドシステム——ソーシャルメディア等の組み込み」を発表した。本発表では、海外文献調査から、AIによる従来のレコメンドシステムについて整理した。その結果から本研究での分析モデルシステムの構築を試みた。今後も学会発表、シンポジウム、投稿論文にて報告する予定である。